

《アテモヤ》

参考にあてもやについて、概説する。

1908年から、フロリダ州マイアミにある亜熱帯植物園のウエスター博士(P.J.Wester)により、バンレイシ間での交雑育種試験が開始された。同氏は1911年にバンレイシにチェリモヤの花粉を交雑して得られた種子をフィリピンから持ち帰り、その種子から24樹の実生樹を育成し、ラマオ試験場に定植した。1913年にそのうちの一樹が結実し、この果実をあてもやと命名した。アテモヤの最初の ate はブラジルの言葉でバンレイシを意味し、moya はチェリモヤのモヤから取ったものである。

1914年には、さらに19樹でも結実し、その後アテモヤとその他のバンレイシ属との交雑も行われた。このようにして、現在多数のアテモヤ品種が存在するが、それぞれの品種において、何が花粉親なのか、また、どれだけの割合で両親の性質を受け継いでいるのか、明確でない場合が多い。

生育に必要な環境はチェリモヤとバンレイシの間で、生育適温は平均最低気温 10~20、平均最高気温 22~32 の間で、果実生育適温は平均最低気温 13~17、平均最高気温 22~26 の間である。

アテモヤはオーストラリア、イスラエル、フロリダ州、及び東南アジアの一部で経済栽培が行われている。